いのちと生きる

重兼芳子

中公文庫

中公文庫

いのちと生(い)きる

定価はカバーに表示してあります。

1994年6月10日初版
1997年6月20日再版

著　者　重兼芳子(しげかねよしこ)

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1994 CHUOKORON-SHA,INC. / Etsuko Suematsu

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-202109-X　C1195　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

いのちと生きる

重兼芳子著

中央公論社

いのちと生きる　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1 不意の知らせ 9
2 肝臓に影が… 21
3 夫の狼狽 40
4 長女の決断 52
5 羽田の別れ 61
6 札幌の病院で 70
7 病名を知らない人々 85
8 東京からの見舞い 101
9 手術前の検査 111

10 夫の葬儀 132
11 若き日の出会い 143
12 生死の引き綱 157
13 突然の麻痺 168
14 外泊の夜と朝 182
15 大地に癒されて 201
16 「第九」を唱う 206
解説 鈴木秀子 215

いのちと生きる

1　不意の知らせ

レースのカーテンを透して、北国のやわらかな四月の陽光が病室に満ちていた。眼を閉じたまま、わたしは全身で光を感じ、光のなかにさらされている自分の体の輪郭を感じていた。確かに手術は終ったのだ、大腸の半分と肝臓の半分を切除されたわたしの臓器は、腹腔内で大きくかたちが変ったのだろう。

臓器がいかに変化しようとも、外側から見るわたしの体の輪郭には少しの変化もないはずである。さわさわと、いのちの気配が体の底から立ち昇ってくる。体が生きようとしている。術後三日目、自分の体をようやく取り戻すことができたような気がして、うっすらと眼を開けてみた。

変化がないと感じたのは眼を閉じていたからだった。眼を開けてみるとわたしの体は幾本ものチューブにつながれている。鼻に酸素のチューブ、鼻から胃へ通じる胃管、首

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

の付け根に栄養補給の点滴、そして脇腹に開けられた二ヵ所の傷口から、腹腔内の廃液を出すための二本ずつのチューブ、腕には輸血、そして尿管も……。

病室のドアをそっと開けて、受持ちの医師が入ってきた。しばらくベッドの傍に立ってわたしの様子をうかがい、脈を診た。もう一度盗み見るようにわたしの顔を見て、

「よかったですねえ、症状が安定してきました。これから日を追って恢復しますよ」

と言った。

「ありがとうございました。もう、どこも痛くありません。それにしても、この鼻のチューブだけでも抜いていただけませんか。うっとうしくてたまりません」

医師は、腸がもう少し動くようになってから抜きましょうと言って、病室から出て行った。

入れ違いに、毎日わたしの看病のために病院に通ってくる長女と、その夫が入ってきた。二人とも血の気の失せた沈んだ顔色でベッドの傍に寄ってきた。

「先生がね、もう大丈夫と保証してくださったの。ほんとうによくやってくれたわねえ、もう心配ないからね、ありがとう」

わたしは長女夫婦に心からそう言った。

三日前、朝から手術室に入り、眼を覚ましたのは翌日の朝だった。長女夫婦とその子

供たちが傍にいて、かわるがわるわたしに声をかけた。
「悪いところをきれいに取ったからね」
「先生は手術が大成功だと言ってくださったからね」
「よくがんばったね」
一人一人の言葉が、実に新鮮に聞えた。痛いところはどこにもなかった。半醒の状態で聞く家族一人一人の呼びかけが、まるで梢から梢へ渡りながら啼く小鳥の声のように快く響いた。だがその声のなかに、心待ちにしている夫の声が聞えない。なぜ、と問いかけようとすると眠りのなかに引きこまれてゆき、覚めたり眠ったりしながら、術後の三日間を過したのだった。
長女夫婦は沈んだ表情で黙っていた。
「もう、あれから三日経ったのよ。そんなに心配そうな顔をしないでね。もう大丈夫なんだから」
わたしは長女夫婦を励ましたが、二人は肩を落してうなだれている。わたしの容態になにか思わしくない徴候が現れて、それを医師から聞かされたのだろうか。疑心暗鬼になったわたしは、「先生からなにか言われたの」と尋ねた。
「あのねえ、おとうさんが……」

娘が小さくつぶやいた。

長女の夫の父親が九十一歳の高齢であることを思い出した。足腰がかなり弱っていて、人手を借りなければ起居動作ができない状態だった。

「おとうさまに、なにかよくないことが起きたのね、病気が重くなられたの？　こんなところにいないで、早く二人で傍へ行ってあげなさい。こちらは大丈夫だから」

長女は静かに首を横に振った。切羽詰まった顔色だった。

長女のただならぬ様子に一瞬たじろいだが、九十一歳という高齢を思った。長女夫婦は、ただ黙ってうなだれたまま身じろぎもしない。

決心したように長女は顔をあげ、

「違うの、うちのおとうさんなの。今日、午前十時に亡くなったの。おかあさん、おかあさん」

と涙声で言った。

長女の夫がわたしの手を固く握りしめた。

「なに言ってるの、おとうさん、どうして手術のとき来てくれなかったの、こんなに待ってるのに、いったいどうしたの」

長女の夫はわたしの手を握りしめたまま、視線をぴたりとわたしに合わせた。

「おかあさん、ぼくたち皆で相談した結果、おかあさんには隠さずに知らせようと決めました。おとうさんは右手のしびれを訴えられたので、大事をとって一週間前に入院されたのです。軽い脳梗塞でした。リハビリをはじめていたのですが、おかあさんの手術の成功をお知らせすると、とても喜ばれて見舞いに行くと張り切っておられたのです」

早くその先を聞かせてと、わたしは眼顔でうながした。

「昨日、早く元気になって見舞いに行きたいと、ご飯を急いで食べて、あまり急いだので食道ではなく、気道にご飯を呑みこんで……。でも、そのときは容態が悪くなかったの。急なことにはならないからと、先生が言われたのに急変したの。あたしたち誰も間に合わなくて……」

長女が声を震わせながら言った。

わたしの手術のために、長女の家族はぴたりと付き添っていた。一週間前、夫が軽い脳梗塞で入院したので、サンパウロに出張中の次男に帰国してもらい、休暇を取って夫に付き添っていたのだという。

そこまでの順序は明確にわたしにも理解できた。その先である。夫は看病していた次男ただ一人の腕のなかで、安らかな寝息を立てながら、寝息が少し早くなったと思う間もなく、さらに深く眠り、ふっと途切れた。

「早く先生を呼んで」
わたしは叫んだ。病室の外で待機していたらしい医師が急いで入ってきた。
「先生、体からチューブを全部抜いてください。これから夫に会いに行きます。寝てなんかいられません」
夫がうろうろと視線をめぐらせてわたしを探している。わたしも麻酔から覚めたとき、夫の姿を探したのだ。
自分の手で鼻に入れられた酸素のチューブを引き抜いた。次いで胃管も抜こうとした。その手を医師が強く抑えた。
「今、あなたを動かすわけにはゆきません。医師と看護婦が付き添って、寝たままで搬送する方法はないかと検討してみましたが、やはり危険です。大きな手術でしたからね。手術は成功したのに、それを無にするような危険にさらすことはできません。あなたのいのちを第一に考えましょう」
医師は強い視線でわたしをみつめた。
安らかに……と長女は言ったが、夫は決してそのような人ではない、夫は死に対して極端に臆病で、死ぬのが怖くてたまらない人なのだ。わたしだけには隠そうとせずにその臆病さをさらけ出した。

健康ドリンクを、食後に必ず飲んだ。半年に一度、人間ドックに入るのを、二十年間欠かしたことがない。今年の三月にも恒例のドック入りをして、年齢相応の健康体であることが保証された。少しの風邪や腹こわしにもすぐにかかりつけの医師へ走った。適度な運動と適量の食事、そして睡眠も充分にとった。健康に良いと知らされれば、努力を惜しまなかった。『壮快』『生き生きライフ』『百歳まで生きよう』などの雑誌を愛読した。

死とは絶対に似合わない夫に、死が訪れるはずがない。この眼で確認するまで、どうして信じることができようか。わたしのほうが確実にいのちの危険に直面していたのだ。もう誰にも頼まない、とにかく夫の傍に駆けつけよう、早くベッドから脱出して、自分の足で歩いて行こう。

医師の半袖の白衣から二の腕がむき出しになっていた。その腕がわたしを羽交い締めにして、誰かが肩に注射針を刺した。痛みが走る間もなく、ベッドから脱出しようとしていた力が萎えて、わたしはへなへなとベッドに沈みこんだ。そして、混迷のなかへ引きこまれてゆき、意識が失われた。

車体は白いもやに包まれていた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com